情報デザインと他教科との連携

北陸学院短期大学 辰島裕美
tatsushima@hokurikugakuin.ac.jp

0.はじめに

北陸学院は幼稚園から小･中･高･短大までの私立の総合学院で、中学 1･2 年生は週 1 時間、高校では教科情報 (1･2 年生で 1 単位を 2 年間) と選択科目の情報演習 (3 年生で 2 単位 1 年間)、短大で情報機器演習Ⅰ･Ⅱ(各 2 単位 1 年間)を私が担当しており、中学･高校･短大と、一貫教育を目指しやすい状況にあるものの、それぞれの 1 年次では個人差の開きが大きく、満足のいく授業内容には至らず、一貫教育カリキュラムの展開が課題である。

これまでの授業で、新たな工夫や展開を試みるとき、すべてを自分の力でやり切れるかどうか、という点で実行するか否かを決めていたような感がある。昨年この場で報告した、『PC は道具であり、それを教えるときには別のテーマが不可欠、ゆえに「情報デザイン」をテーマとしたときに、芸術の指導力のない情報科教員だけでは無理がある』ということから、他教科教員のサポートの必要があった。また、昨今”協働”をキーワードとした活動や場の模索が注視されているが、私の協働の第 1 歩は、学校内でどのように他と協力できるかであった。今回、宗教科･美術科という他教科との連携の実践をファーストステップとして、よりよい授業へと発展させるために、この場で発表させていただき、諸先輩方からの改善策やご指導をいただければ幸甚である。

1.きっかけと計画

金沢市では、1997 年より新たな芸術･文化の創造、人材育成をめざし、エレクトロニックアートの「eAT KANAZAWA(イート金沢)」を開催しており、その一環として、児童、生徒を対象に「eAT ジュニア芸術展」を開催している。今回の芸術展のテーマは「おくりもの」で、教育理念にキリスト教教育を打ち出している本学院としては、クリスマスや聖書など「おくりもの」とつながるテーマなので、宗教科教員が聖書の「おくりもの」の授業を行い、その話から各自のイメージを表現する道具として PC を使い作品を制作する過程で美術科教員による指導を盛り込むという内容にした。中学 1･2 年生、高校 2･3 年生で、作品募集が始まる 9 月から 4 回の授業時間を使って指導･制作し、10 月に学校から団体応募した。

2. 狙い

1. インターネットの有効活用として、フリーソフトをダウンロードして使う
2. 今回テーマの「おくりもの」について、聖書の講話を聞き、理解を深め情操を高める。
3. パソコンで描画することを通し現実の描画との違いを知り、長所を利用する
4. 前述の長所による芸術的な描画センスを養う
5. 校外からの評価を受け、次の活動の基とする

3. 授業シラバスと実行の報告

時間	内　　容
1	･フリーソフトのダウンロード ･描画ソフトの使い方指導
2	･聖書科より「おくりもの」の講話 ･ラフのイメージング
3	･作品制作 (芸術科指導)
4	･作品制作とタイトル･コメント作成

1 時間目の授業内容と様子　フリーソフトのダウンロードサイトについて目的と注意点を説明。あらかじめダウンロードしておいた描画ソフト「ゆめいろの絵の具」とフォトレタッチソフト「JTrim」を学内のサーバから各自のフォルダにコピーし、教員のデモンストレーションの後、使ってみる。ソフトがダウンロードできる便利さと、授業でお絵かきできることを純粋に喜び楽しむ生徒と、本物の絵の具より面倒だという生徒の声も。

2 回目　事前に聖書教員に、パソコンルームでの授業を依頼してあったが、諸事情ですべてのクラスでの授業が困難なため、聖書教員の計画した中学生向けと高校生向けの 2 種類の内容の授業を情報教員が行った。教材の絵本 2 冊「かみさまからのおくりもの」「はんぶんあげてね」はモニタで見せたあと回覧し、プリントは配布

して解説した。おくりものをテーマにした聖書の教えは理解されたが、そこから、どのような絵を描くかイメージすることに時間がかかった生徒が大半でソフトでの鉛筆の下書きが出来上がる生徒は少数だった。

3 回目　いよいよ本格的に描き出し、時間の後半に加わる美術教員にアドバイスをもらうため、ある程度完成に近づけるよう指示。途中で入室の美術教員に生徒は遠慮がちで、個別指導の場面は少なかった。

4回目　授業の初め、前回から保存してある作品をクラスで互いに見あい、意見交換の場面も。美術教員に、構図･配置･色などのアドバイスを乞う生徒が増え美術教員が引っ張りだこになった。半ばで、フォトレタッチソフトの部分的な編集や効果の使用法をデモンストレーションし、美術教員のアドバイスも参考にして仕上げ。完成した生徒から、タイトルとコメントをテキストで入力し提出。3 名の生徒が、時間が足りないと特別に昼食時間にパソコンルームに来室し、仕上げていた。しかし反面、仕上がりがうまくいかず、出品を拒否する生徒が 2 名。

4.結果と学内での表彰

応募総数 3727 点の中で、中学生と高校生それぞれ 1 名ずつが優秀賞を受賞した。送られてきた表彰状と副賞(図書券)を校内の表彰伝達で披露し、作品は印刷してコンピュータルームと職員室前の掲示版に 3 ヶ月掲示した。校内では、金沢市の展覧会に受賞したことを高く評価された。宗教科と美術科との連携授業を学内にアピールするためには、2 名受賞という結果は、好機であった。受賞した高校生は情報マネジメントの分野に進路を決めた。

5.まとめ

他教科との仕事の流れとして、まず宗教科･美術科の教員に協力の意向を確認し快諾をもらってから、アイディアを校長の耳に入れ、関係部署に文書で計画を提出、承諾を得た。情報科の授業に、宗教科･美術科･の教員の時間割を調整した結果、クラスによって指導の時間が不公平になってしまったが、大きな問題ではなかった。宗教科の聖書教員が事前に十分な授業計画と情報教員へのレクチャーがなされたことと、内容が平易なテーマだったこともあわせ、情報教員による聖書の授業は成功したといっていいと思う。しかし、生徒が聖書から学んだ教えから、「おくりもの」のテーマでこれから絵を描くことへうまく繋げなかったことは、次回への課題である。

美術教員は非常勤なので、調整が困難にもかかわらず、協力的な授業参加は助かった。事前に美術と情報の十分な調整時間は取れなかったが、生徒からの質問に、美術教員が芸術指導する際、情報教員がフォトレタッチソフトの特殊効果を紹介し、生徒が挑戦して満足できた場面は喜びが共有できて盛り上がった。情報教員だけでは、このような受賞結果を残せなかったので、他教科との連携授業は生徒に有益であり、さらに進めたい。

- 芸術展で優秀賞 2 点受賞の立派な結果を残した。
- 描画ソフトとフォトレタッチソフトの特徴を知り、効果次第で瞬時に作品が様変わりする経験で、インターネットとコンピュータの利用を広げた。
- 表彰で努力の成果を称え、意欲向上につながった。
- 他教科との連携は、調整が鍵であり、教員間の人間関係によってうまく進められる足跡ができた。
- 副次的効果として芸術展のテーマ「おくりもの」の聖書の授業は、学内で展開するスローガン「Realize Your Mission」にマッチし、授業を超えて聖書の理解に役立った。
- 美術教員の指導は、受賞の結果に直結する大きなポイントである。芸術レベルの高い作品を多く排出するには、さらに美術教員の意見を聞き、役割分担をすれば高い成果を期待できると推測する。

優秀賞
中学に 2 年生
「一人ひとりの命」

優秀賞
高校 3 年生
「ある日の夕焼け」